



AET1

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB

Monday 30 May 2016 13.30 to 16.30

Paper J7

Literary Japanese

Answer **both** sections and **all** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

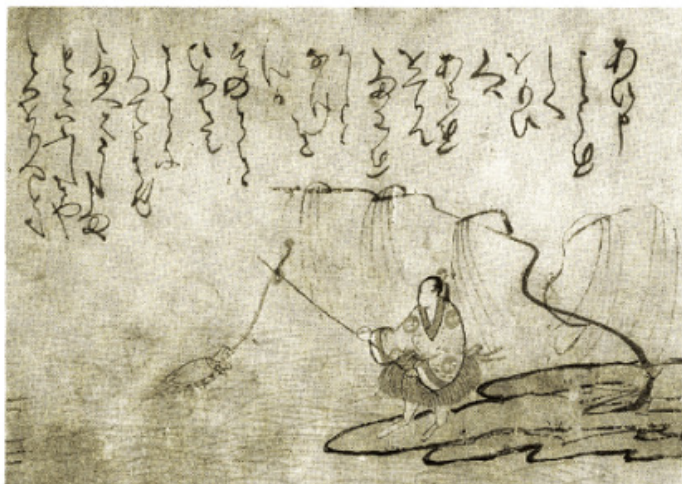
SECTION A

(1) Translate the following passage from an **unseen** text into English. The headnotes are for reference only. [40 marks]

一 京都府の北部。
 二 『万葉集』七四〇に、「水江の浦島子」とあつて、古くから「浦島子」として知られていたが、ここに至つて「太郎」という名をつけられたものである。
 三 世渡りの道。
 四 未詳。淡路島の「絵島が磯」を思い寄せたものか。
 五 「鶴は千年、亀は万年」の齡を保つということは、長生きでめでたいことのとたとえに引かれる。中国の神仙説話にもとづく。
 六 「思ひ知る」は、心にさとる、なるほどと思ひあたること。ここでは、海に返してもらつた恩を思ひ知れというのである。

浦島の太郎

昔、丹後国に、浦島の太郎とて、朝夕釣をして、世路をいとなみけるが、ある時、あしまが磯といふ所にて、大きな亀を釣りけるが、「亀は万年の齡を経ぬるもの、思ひ知れ」とて、放しける。



Question 1 continued...

七 引き寄せて見ると、その舟には、美しい女人が、ただ一人で乗っていたことについてしるされてはいない。渋川版に、「あやしみやすらひみれば、うつくしき女はう只なひとりなみにゆられて、しだひに太郎がたちたる所へつきにけり」とある。

八 遠くひろびろとしたさま。

九 「不思議」の誤り。

二〇 都合のよい船、ついでに船に乗って。

一 本船につく供船。沖にとまっている本船から、荷物を積み分けて揚げる降ろしするの用にられる。

二 敬意を含んだ二人称の代名詞。あなた。

三 無理に。しいて。

さても、その頃に帰り、また明けの日、釣をせんと思ひ、沖の方へ出でけるに、小さき船一艘見ゆる。さても、不思議や、引き寄せて見ばやと思ひ、引き寄せて、「いかなる人にてましますぞ、かほど漫々としたる海上に、一人見え給ふらん、不思議さよ」と申す。その時、浦島、ふしに思ひて、申しければ、その時、姫君のたまふやう、「みづからは、都方の者にて候ふが、ある船に便船をして候へば、にはかに大風吹きければ、船の者ども騒ぎあひ、一人女を乗せたるものと申し、枝船降り、みづからを乗せ、流し申し候へば、いかなるゑしだが磯へも行くらんと思ひしに、御身に逢ひ申すこと、嬉しく思ひ候へば、あはれ、送りに給はれかし」と歎きける。その時、姫君、まことに、たつて申させ給へば、浦島も、こは不思議やとは思へども、「さらば、送りに参らせ候はん」とて、同じ船に乗り、いづくをさして出でけるが、船の速く行くこそ不思議なれ。

Urashima no Tarō (SNKBZ 63), pp. 254-256.

(TURN OVER)

Vocabulary list

| | |
|------|------------------------|
| 亀 | turtle |
| 放す | to release |
| 沖 | the open sea |
| 艘 | counter for boats |
| 不思議 | ふしぎ |
| 引き寄す | to draw something near |
| にはかに | suddenly |
| みづから | 私 |
| 逢ふ | 会う |
| 歎く | to lament |

SECTION B

(2) Translate the following passage from a **seen text** into English. Comment on the grammar points below: [20 marks]

「さればとよ、是は旅いたすものに侍るが、きのふのたそがれ、此ところ^一にきたり。求むべきやどしなれば、この宮^二にあかさんとおもひ、ゆくゑもしらぬたびの空^三、うさもつらさも身を^四かこちて、つれづれに侍りしに、また跡^五より座頭^六、これもつかれがほのを^七ちかた人とみえてきたる。ともによりゐてあだくらべの旅^八の物がたりなどするにぞ、『我にひとしき人もあめり』とおもふに、かのびは法師^九、かうばこのやさしきを^{一〇}とりだし、『これよきものか見て給れ』とて、わがかたへなげたり。さらばとて、右の手にとるに、とりもちのごとくしてはなれず。左にておさふるにも又とりつく。左右のあしにてふみおとさんとせしに、足もはなれずとかくとする内に、かの座頭^{一一}くもと現^{一二}じて、我を^{一三}まとひて天井^{一四}へのぼり、ひたもの血^{一五}をすひくらふ。いたくたへがたふして、命もきゆべきにきはまりしに、ふしぎにすくひ給ふ。いのちのおやなり」とかたり侍りしと也。

Otogi monogatari (SNKBZ 64), p. 468.

Grammar points to comment on (see underlined passages):

- 1) ものに侍る
- 2) 求むべきやど
- 3) 物がたりなどするにぞ

(TURN OVER)

(3) Translate the following passage from a **seen text** into English. Comment briefly on the rhetorical techniques used in the *waka*: [20 marks]

猶^ゆ行^ゆきく^くて、武蔵^{一四}の国^{くに}と下総^{しもつふさ}の国^{くに}との中に、いと大^{おほ}きなる河^かあり、それをすみだ河^かといふ。その河^かのほとり^{ほとり}にむれ^{一五}みて思^{おも}ひやれば、限り^{かぎ}なくとをくも来^きにけるかなとわ^{二七}びあへるに、渡^{わた}守^{しもり}、「はや舟^{ふね}に乘^のれ。日^ひも暮^くれぬ」といふに、乘^のりて渡^{わた}らんとするに、みな人物^{一八}わびしくて、京^{きやう}に思^{おも}ふ人^{ひと}なきにしもあらず。さる^{一九}おりしも、白^{しろ}き鳥^{とり}の嘴^{はし}と脚^{あし}と赤^{あか}き、嶋^{しま}の大^{おほ}きさなる、水^{みづ}のうへに遊^{あそ}びつゝ魚^{いそ}をくふ。京^{きやう}には見えぬ鳥^{とり}なれば、みな人^{ひと}見^み知らず。渡^{わた}守^{しもり}に問^とひければ、「これなん宮^{みや}こ鳥^{どり}」といふを聞^ききて、

13 名^なにし負^おはばいざ事^{こと}問^とはむ宮^{みや}こ鳥^{とり}わが思^{おも}ふ人^{ひと}はありやなしやと

Ise monogatari (SNBT17), p. 89.

(4) Translate the following passage from a **seen text** into English. Comment on the 'narratorial presence' in the text and on the use of honorifics: [20 marks]

〔一〕帝の桐壺更衣きりつばのついでの御おぼえい衣への御おぼえまばゆしまばゆし
いづれの御時おほむときにか、女御にようご、更衣かういあまたさぶらひたまひける中なかに、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふあり
けり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々かたがた、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じ七ほど、それより下臈げらふの更衣たちはましてやすからず。朝夕あさゆふの宮仕みやづかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里さとがちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思おもほして、人の譏そしりをもえ憚はばかせたまはず、世の例なめしにもなりぬべき御もてなしなり。

Genji monogatari (SNKBZ 20), p. 17.

END OF PAPER

Page 7 of 7